

群 教 セ	G01 - 03
	令 4. 281集
	国語 - 中

自分の考えを広げ深められる生徒の育成

——意見の比較を踏まえた話し合い活動を通して——

特別研修員 和田 佑果

I 研究テーマ設定の理由

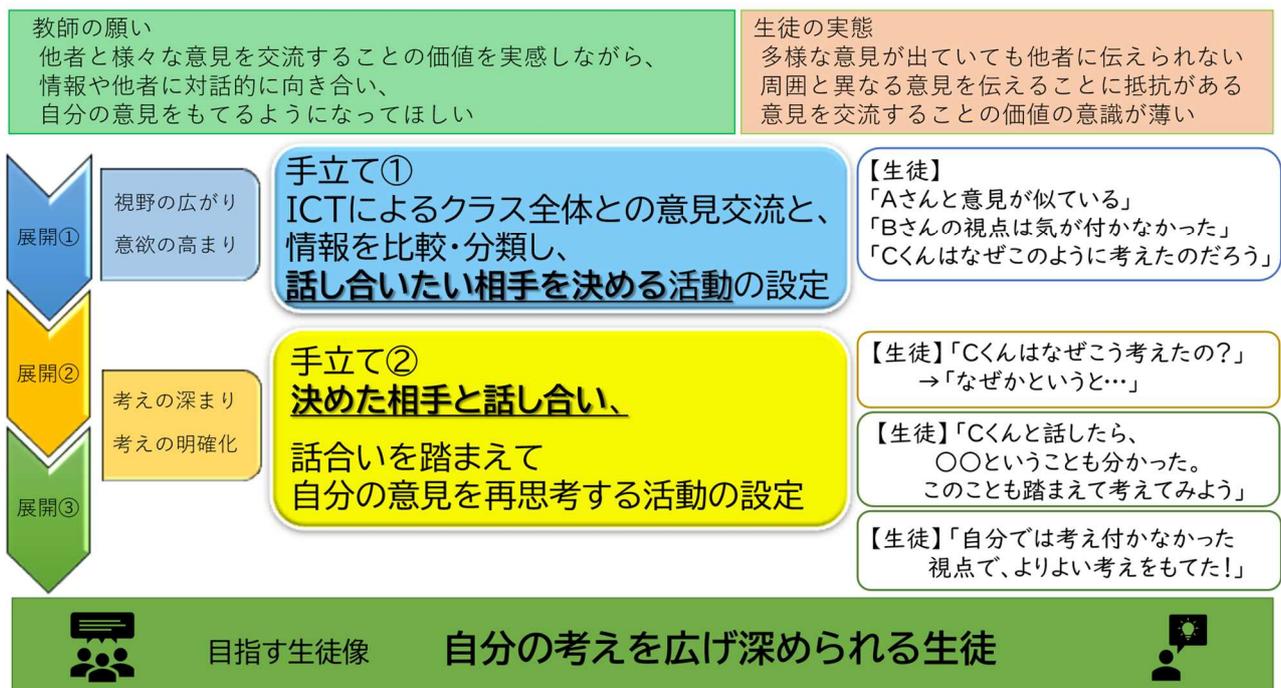
平成 29 年告示の学習指導要領では、国語科の目標の中で「人との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を養う」とあり、情報や他者に対話的に向き合いながら自分の意見をもつことの重要性が指摘されている。また、新設された「情報の扱い方に関する事項」については「自分のもつ情報を整理して、その関係を分かりやすく明確にすることが、話や文章で適切に表現することにつながる」との解説が見られる。

研究協力校の生徒の多くは、学習活動の中で自分なりの意見を明確にもつことができる。しかし、意見をもつことはできて他者に伝えられない場面が多く見られる。背景として、周囲と異なる意見を伝えることに抵抗があること、他者と意見を交流することの価値の意識が薄いことが考えられる。このような生徒が、自分の思いや考えを広げたり深めたりできるようになるには、まさに情報や他者に対話的に向き合うことが大切であると考えられる。

そこで、生徒が他者と様々な意見を交流することの価値を実感しながら自分の思いや考えを広げ深められるよう、まず、ICTを活用して様々な意見に出会い、自分の意見と他者の意見を比較し分類する活動を設定する。さらに、意見の比較や分類によって話したい相手を自分で決め、その相手との話し合いを踏まえてより広い視野で自分の考えがもてるよう再思考する活動を設定することで、生徒が自分の考えを広げ深められることをねらい、上記のとおり主題を設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

生徒が他者と様々な意見を交流することの価値を実感しながら自分の思いや考えを広げ深められるよう、以下の手立てを設定する。

手立て1 ICTによるクラス全体との意見交流と、 情報を比較・分類し、話し合いたい相手を決める活動の設定

他者の意見を自分の考えと照らし合わせながら読む時間を設定し、様々な考えに触れられるようにする。次に、自分の意見と比較して「同じ意見、似ている意見、共感した意見」、「違う意見、新しい発見ができた意見、疑問をもった意見」など、気になった意見を理由と共にノートに記述させ、めあてを達成するための話し合いをもつ相手を決められるようにする。

手立て2 決めた相手と話し合い、話し合いを踏まえて自分の意見を再思考する活動の設定

ノートに記述した相手を含む2、3人のグループを作り、互いの意見にコメントし合ったり質疑応答したりする時間を設定する。ノートに話し合った内容を必要に応じて記述させ、自分の意見を練り上げる際の参考にできるようにする。次に、交流を踏まえて自分の考えを整理してまとめ、意見として記述する活動を設定する。このことで、交流時に思考した内容を生かしてめあてを達成できるようにする。

これらの手立てにより、他者の意見を読むことに加え、文には書き切れなかったことや疑問点を話し合うことで生徒がより深く考察できるようにする。さらに、自分の意見を再思考する場面では、話し合った内容も踏まえて意見を記述することで、広い視野で自分の意見や立場を決定し、自分の意見の根拠がより深められることを目指していく。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 手立て1については、話したい相手を決めることによって他者の意見を読むことに必要感が生まれるため、生徒が主体的に他者の意見に向き合い、話し合いの方向性や視点を明確にすることができた。
- 手立て2については、決めた相手との話し合いによって文章には書き切れなかった考えを伝え合ったり、質疑応答し合ったりすることで、聞き手として相手の意見への理解をより深められるだけでなく、話し手として自分の意見をより明確にすることができるようになることが明らかになった。
- 文章を読むことによる交流活動と話し合いによる交流活動とを1単位時間内に設定することで、学習課題に対して様々な角度から思考したり自分なりに是非を判断したりすることを促すことができた。このことから、意見の比較を踏まえた話し合い活動を設定することは、自分の考えを広げ深められる生徒の育成に有効であると考えられる。

2 課題

- 同じ意見をもつ相手と話し合う際に、相手の考えをより詳しく理解するための話し合いの進め方を生徒に提示するなど、よりよい話し合いとするための支援が必要である。
- 「広げること」は1単位時間内で行うことも比較的容易だが、「深めること」に関しては時間の経過も必要であるため、本時以降も生徒の姿を見取れることが望ましい。

実践例

- 1 単元名 広い視野で考え、意見をもとう
 教材名 「故郷」光村図書（第3学年・2学期）

2 本単元について

本単元で扱う文学的な作品「故郷」は、魯迅が当時の中国の不安定な政情、庶民の不安や不満を背景に執筆した小説である。「同じ希望をもって行動する人が増えれば、『希望』は実現するのだ」という作者の思いは、国や時代を問わない普遍的な内容であり、長く読み継がれる魅力の一つである。人物の描写や会話文が多く、登場人物が印象的に描かれており、登場人物同士の関係や過去と現在の変化が読み取りやすい展開となっている。登場人物の生き方や場面の特徴を吟味したり評価したりしながら批評する活動にふさわしい教材である。また、境遇の違いで決裂する人間関係の悲しさ、人間の精神的な弱さ、自分自身の望む生き方、社会の在り方など、人間や社会について考えるきっかけにもなるだろう。このような考えから、本単元では以下のような指導計画を構想し実践した。

目標	(1) 自分の生き方や社会との関わり方を支える読書の意義と効用について理解することができる。 (知識及び技能) (2) ①文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えることができる。 (思考力、判断力、表現力等) ②文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもつことができる。(思考力、判断力、表現力等) (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとする。(学びに向かう力、人間性等)	
評価 規 準	(1) 自分の生き方や社会との関わり方を支える読書の意義と効用について理解している。(知識及び技能) (2) ①「読むこと」において、文章を批判的に読みながら、文章に表れているものの見方や考え方について考えている。(思考力、判断力、表現力等) ②「読むこと」において、文章を読んで考えを広げたり深めたりして、人間、社会、自然などについて、自分の意見をもっている。(思考力、判断力、表現力等) (3) 言葉がもつ価値を認識するとともに、読書を通して自己を向上させ、我が国の言語文化に関わり、思いや考えを伝え合おうとしている。(主体的に学習に取り組む態度)	
過程	時間	○主な学習活動
つかむ	第1時	○作者や時代など作品の背景を知り、主題を踏まえながら本文を通読することで、内容を捉え初発の感想をもつ。
追究する	第2～6時	○作品全体に与える効果や表現の工夫を捉える。 ・ルントウに関する回想の場面 ・ヤンお婆さんとの再会の場面 ・ルントウとの再会の場面 ○言動や様子などの文章表現から読み取った登場人物の生き方や場面の特徴について、自分の知識や経験と比べて考え、自分の意見をもつ。 ○根拠を明確にしながらか 150字程度の文章で作品の批評をまとめる。
まとめる	第7時	○今後の読書の仕方や読書の意義について自分の考えをもつ。

3 本時及び具体化した手立てについて

本時は全7時間計画の第6時に当たる。本時のねらいは、「印象に残った登場人物や場面について考えたことを交流することで、広い視野で作品の特性などについて自分の意見を持ち、『故郷』の批評ができるようにする」ことである。ねらいを達成するための手立ては次のとおりである。

手立て1 ICTによる「印象に残った登場人物や場面」についてのクラス全体との意見交流と、自分の意見と比較・分類することを通して話し合いたい相手を決める活動の設定

より広い視野で批評できるよう、批評するために欠かせない印象に残った登場人物や場面に対する様々な意見に出会わせることが目的である。また、生徒自身に興味をもった意見を選択させることで、話し合いへの見通しや意欲を高めていく。

手立て2 自分で決めた相手と共通点や相違点を話し合ったり、質疑応答したりすることを通して話し合いを踏まえた自分の考えを批評文として記述する活動の設定

興味をもった事柄について感想を伝え合ったり、読むだけでは理解が不十分だったことを対話によって補ったりすることで更なる思考を促し、批評文を書く準備段階とすることが目的である。また、話し合った事柄全てを自分の批評文へ入れ込むことは不可能であるため、どの事柄を踏まえるのか生徒自身が判断しながら取捨選択することで批評の方向性が明確になることを狙っていく。

4 授業の実際

(1) 前時まで

第1時は作者と時代背景及び作品の主題を知った上で通読し、初読の感想を記述する活動を行った。第2時から第4時では、それぞれの場面がどのように作品全体に関わるのかを読み取る活動を行った。当初は中国語由来の見慣れない名詞や難解な熟語、回想と現在との場面の移り変わりに戸惑う生徒が多く見られたが、登場人物の言動、場面と場面のつながり、各場面が強調している事柄を考えていく中で作品への理解が深まっていった。第5時では、印象に残った登場人物や場면을記述する活動を行った。「身分の違いによって友人関係が破綻したことの悲しさ」「主人公への同情」「ルントウへの同情」「ヤンおばさんについての賛否」「『紺碧の空に金色の月…』という表現の巧みさ」「主人公が見出した希望について」など、多様な意見が見られた。

(2) 本時の展開①

前時に書いた文章をタブレット上で自由に閲覧（図1）し、自分の意見と比較や分類をしながら話し合いたい相手を決める活動を行った。生徒は「自分の考えを深められそうか、広げられそうか」という視点で他者の記述を読み、話したい相手の名前や選んだ理由をキーワードも併せてノートに記入していった（図2）。ほぼ全員の生徒が「深められそうな人（自分の意見と同じ、似ている、共感）」「広げられそうな人（自分の意見と違う、新しい発見、疑問）」それぞれを数人ずつ選び、ノートに記述できた。7割の生徒は、「同じ場面に着目している」「自分と違う捉え方をしている」等、選んだ理由も簡潔に記述することができた。

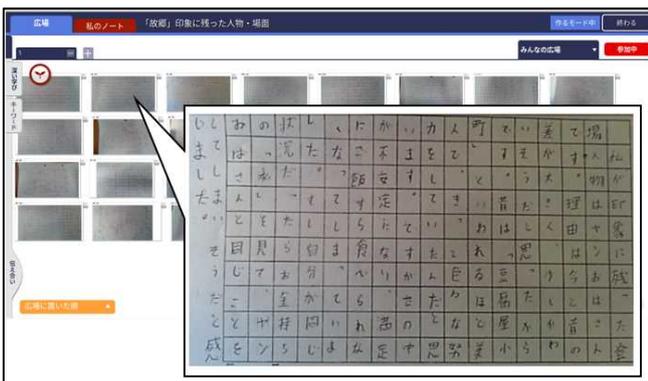


図1 意見共有画面（タブレット）

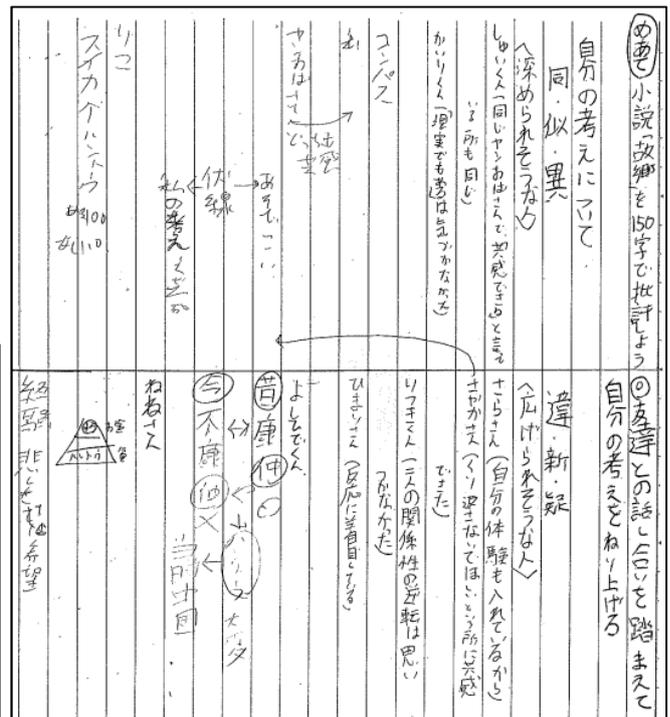


図2 話し合いたい相手の名前や理由の記述

(3) 本時の展開②

選んだ相手と話し合う活動を行った(図3)。生徒はノートの記事を基に速やかにペアやグループを作って話し合いを開始し、2回の入替えもスムーズに行っていた。互いの考えにコメントし合ったり質疑応答し合ったりしていく中で、自分の意見をより明確にする生徒(図4)、互いの視点の違いに気付く生徒、新たな話題や気付きに発展する生徒(図5)の姿が見られた。



図3 話し合い活動

A:(自分の意見としては)ルトウの気持ちに賛成しつつ、若干批判しつつみたいなき。自分とケンカしてるみたいなき。
 B:ああ、だから最後(Aの、「むかついた」という記述)は自分自身に対する考えてることか。
 A:そうそう、自分の中に二通りある。
 B:弱者側のルトウを非難してしまうのも違うような、何か嫌だっというね。
 A:そうそう!

図4 考えがより明確になった話し合い

C:完全な悪役がないけどバッドエンドじゃない?だから共感できると思った。
 D:ヤンおばさん人間味あるよね。
 一同:ああ~!
 E:〇くんがヤンおばさんに共感してることに共感した。でも、自分は「私」が考えてることにヤンおばさんが考えてることにどっちにも共感した。(「私」は金持ちだと)自慢してないのに、(ヤンおばさんに)自慢しているように思われちゃうことがリアルだなと思った。
 一同:リアルだねえええ

図5 新たな話題や気付きに発展した話し合い

(4) 本時の展開③、まとめ

話し合いを踏まえ、批評文を書く活動を行った。活動が開始されてすぐに書き始めた生徒が多く、全員が自分なりに批評文を記述することができた。図6のように自分の意見(実線)や根拠(破線)を明らかにし、話し合いを生かした記述(囲み)が見られた生徒は、全体の8割であった。さらに、振り返りシートには、9割超の生徒が話し合いについて肯定的な記述をしていた(図7)。

「故郷」は一人一人の登場人物に共感でき考えさせられる物語だと思いました。どの登場人物も現実の私たちに共感できるような悩みをもっていて作品に入り込みやすかったです。その中で生きることの難しさを感じました。また、それでも希望をもち、乗り越えようとする「私」を見て主題が伝わり読んで少し元気づけられたような気がします。この「故郷」は読者を元気づけられる物語だと思っています。

図6 生徒Cの批評文の記述

- ・同じ場面でも色々な角度から考えることができた
- ・一つ一つの場面の見方が変わった
- ・やはり話し合いは大事だと思った
- ・自分では気付かなかった表現や新しい考え方を知ることができた。それらのおかげで「故郷」をより知ることができた
- ・自分では考えもしなかつた視点や意見を踏まえて、自分一人では書くことができなかった視点や意見で書いていけてよかった

図7 振り返りの記述

5 考察

当初ヤンおばさんに特化した意見をもっていた生徒C(前ページ図1、図2)は、他の登場人物の立場に立った意見や物語上の出来事が現実的だという意見に触れて共感し(図5)、新たな視点で再思考し批評文を記述することができた(図6)。これは、文章での交流と話し合いでの交流とを併せて設定することで、批評文を書く際の重要なプロセスである、自分のもつ情報を整理して、その関係を分かりやすく明確にすることを後押しできたからだと考えられる。

理由をもって話したい相手を決めることにより、生徒が目的意識をもって他者の意見を読んだことに加え、話し合う内容が事前に焦点化されたため、話し合いをより効果的に機能させることができた。また、文章での交流の場面でICTを活用することで、効率的に活動が進み、再思考の時間を十分に確保することにつながった。さらに、国語が得意な生徒はより高い達成度を目指しながら、国語に苦手意識をもつ生徒はヒントを探しながら課題解決に向かい活動する姿が見られた。このように、課題解決のための意見交流を生徒が主体的に行い、小説の批評文を書くという活動に向けて互いに意見を交流しながら再思考することで、自分の考えを深めることができた。

以上のことから、情報や他者と対話的に向き合いながら自分の意見をもたせるために設定した二つの手立ては、生徒が自分の考えを広げたり深めたりすることに有効であったと考えられる。